

豊橋百儂人の活動

Activity at Toyohashi Hyakunojin



⑤三遠フェニックスのフェニックスまつりにも積極的に出展 ⑥他ではお目にかかれぬ無農薬梅干をつくる檸檬儂人河合浩樹さんの農園の視察 ⑦百儂人まつりでは自慢の農畜産物を使った品々が楽しめる。今年は10月に開催予定 ⑧各地のイベント会場へ出展し、豊橋の農業の素晴しさを伝えるキッチンカー ⑨葡萄儂人・岩瀬宏二さん謹製の豊橋産巨峰を惜しみなく使用した、季節限定スムージー。地元の野菜や果物を使った季節ごとのスムージーも販売

9

くまでもアナログにこだわり、人と人を繋ぐ立場でありたい」そして、鉢花栽培を行う現観賞花儂人三代目代表、中村さんは「メンバーは皆、私にないものを持っています。この年になって勉強することが本当にたくさん。仕事中はほとんど人と話すことない自分が、この仲間の中にいることがまず、刺激なのです。個々に発信をしながらお互に高め合う。そして皆も私も、地域の方々も元気であります」と思っています」

とはいって、農業従事者は年々減る一方。全国に誇るべきこのまちの農業が、崩れてしまうことも危ぶまれる。農業は「キツイ・キタナイ・カッコウワルイ」の3Kが今までの世のイメージ。しかし、河合さんの提唱する新たな3Kは「革命(カクメイ)・喝采(カツサイ)・回帰(カイキ)」新しくつでも原点に戻り現場にしきれないことに気付く

人がいる。農業従事者は東三河の文化だ。そんな条件下で「農業」を営む彼らがいなかした多様な栽培は、日本の「無形文化遺産」になれば。清水さんのもと一つの野望だ。市、県、国、そして最後は世界にその名を馳せる「豊橋百儂人」に…。

素材本来の持ち味を活かすようになっているそう。「自分たちが愛情を込めて育てたものを、多くの人々に知つて欲しい」そして、本物の味を味わつてもらうことが、評価になっている昨今。百儂人といふ生産者がこだわりを持つつくったものを、自分たちの手で直接消費者に届けられる。顔が見えるからこそ、安全なもの求めるように繋がるという。消費者は安心して購入できるのだ。

市民団体などのイベントが主な出展先だったものの、今では豊橋まつりや炎の祭典などにも出展しているそう。世の中の「地産地消」の意識や、豊橋が「農産物のまち」という認識の高まりもあるのかもしれない。しかし、徐々に豊橋百儂人という団体が認知されてきた証である。豊橋百儂人を8年間支えてきた清水さんはこう語つて

今までにないアプローチと、人にこだわる活動を行う豊橋百儂人。「発想が違う」そんな立場であり続けたいとも清水さんはいう。「通販をやろうとすれば簡単なことです。しかし、それは儂人さんらしく新しく進化させていくこともあります。私はあとも大切だ。

今までにないアプローチと、人にこだわる活動を行う豊橋百儂人。「発想が違う」そんな立場であり続けたいとも清水さんはいう。「通販をやろうとすれば簡単なことです。しかし、それは儂人さんらしく新しく進化させていくこともあります。私はあとも大切だ。